

バスク語の単文における 語順の文体的価値について

堀 田 郷 弘

目 次

はじめに

研究対象の設定

バスク構文の一般的性質

肯定平叙文の語順

否定文の語順

ま と め

はじめに

0. 本稿は一連の拙論「バスク語文法 —ナファロア・ラプルディ方言」¹⁾の第3篇「バスク語における名詞の曲用について」の第2章・I・2で簡略にふれた〈語順〉の問題を補い、発展させたものである²⁾。

諸言語における語順の様相は多様であるが、一般に語形変化によって文の構成要素としての〈語〉の文法的機能がきまる言語においては、語順の自由度が大きい。バスク語はこの種の言語に属している。つまりその〈語〉の機能はほとんど接辞によって定まっている。従ってバスク文の語順は論理的にもまた実際的にも文中の構成要素数の組合せから作りうるほとんど全ての語順がみられ、問題はその多様な語順によって文意のニュアンスがどのように変化するかである。本稿では、この多様な語順をつくるそれぞれの文の構成要素が、その

位置によってどのような文体的価値を与えられているか、そこから何らかの法則を抽象出来るか、それを考察しようとするものである。

研究対象の設定

1.-1. 文の構成要素としての〈語順〉とその〈文体的価値〉

〈語順〉とは語の位置の問題であるが、レベルとして〈文〉と〈句 (= 語群)〉を、また内容からして〈文体的価値〉、〈文法的価値〉、〈意味的価値〉などを考えねばならない。

本稿では、レベルを〈文〉に、内容を〈文体的価値〉(あるいは表現的、修辭的価値とも云えよう)に定める。理由は、バスク語の〈句〉の語順は位置的に〈前位〉か〈後位〉に限られ、しかもほとんど文法的規則として定まっていること³⁾、また内容面からバスク文の語順の〈文法的価値〉および〈意味的価値〉はほとんど存在しないと考えることができる⁴⁾からである。

またバスク語の文の構成要素としては、文法書、研究書などの表現によれば、次のようなものがある。

述語動詞、主語、直接目的補語、間接目的補語、状況補語、属詞補語、文意強調小辞。

N. B. その他、副詞、間投詞、接続詞を入れることができよう。

述語動詞については、強変化動詞の場合は形態的に一語であるから問題はないが、弱変化動詞である場合、助動詞と分詞から成るため、この二つの要素の位置が文体的価値に関係して来ることがあり、二つの構成要素として取扱わねばならぬ場合がある。

文意強調小辞は、それ自体が文中に顕在しない場合でも、他の文要素がその意義を示しているもので、いわば冗語的に小辞が出現すると文意が明確になるものである。一般に、位置からして述語動詞の要素の一部として扱うこともできる。

1.-2. 単文 文はその構造から〈複文〉と〈単文〉に分けることができるが、バスク語では、単文が語順の文体的価値の基本的な特徴を簡潔に示していると

思われるので、本稿では単文を主体に考察をすすめる。

しかし、問題が語順である以上、少なくとも複数の文要素から成る単文であることが必要である。だから次のようなく一枝文>あるいはそれに準ずる文は対象から除外する。

Agur. やあ (挨拶)。

Ezetz. (<ez eta ez) 否なのだ (否定の念押し)。

Ez milesker. 結構です (断わり)。

Zertako ez? どうして (反論的云い返し)。

Ni gezurtti?—Bai, zu. 私が嘘つきだって?—そう, きみがだよ。

次のように強変化動詞⁵⁾の一語で文を成立させているものは全て除く。

Badakit. 私はそれを知っている。

Darmakot. 私はそれを彼に持って行く。

また文を事象に対する理解の仕方でも肯定文>, <否定文>それぞれの<疑問文>と分類でき, あるいは感情の表われによって<平叙文>, <情意文> (このなかに感嘆文, 命令文, 願望文) と分類できるが, 本稿では最も使用度の多い<平叙文>の肯定, 否定の文を中心として考察をすすめる。

1.-3. 文献 <語順>を考察する場合, その対象はバスク語で表現されるあらゆる種類のものであることが最も有効であるのは当然であるが, 本稿ではいくつかの理由から<書きコトバ>で, しかも一般的なバスク文と認められているものに限定した。

<書きコトバ>に限定した理由は, <話しコトバ>においては感情のアクセントによって文要素のニュアンスが指示されるが, 音を伴わない<書きコトバ>にあってはとりわけ位置と価値度が大きな問題となりうるからである。また実際にバスク語では<話しコトバ>と<書きコトバ>の落差が大きく, とりわけ私の手元に<話しコトバ>の資料が不足していることも理由としなければならない。

<一般的なバスク文>という考え方はあいまいであり, 一方バスク語への偏差が生じる危険があるが, これはバスク語の現状を考えてのことである。つま

りく方言のモザイク>といわれるバスク語において近來共通語への希望が高まり、その努力が様々な形で行われ始めていること、また伝統的に<語ること>が重視され、一般的には<書くこと>が未発達の状態にあるが、これに対しても16世紀の DECHEPARE⁶⁾ を先駆にとりわけ19世紀末以来<書くこと>の重視と努力がなされていること、さらに他言語の影響の深さからとりわけ知識人にバスク語らしいバスク語への意識が強まっていること、以上の現状から<一般的な>あるいはあえていえば<正常な>バスク文という考え方をしたのである。

実際に本稿で扱った文例は、スール方言を除くフランス・バスクの二大方言ラブールとバス・ナヴァール方言を中心とするもので⁷⁾、文献としては、少数しか存在しないが、バスク語指導も兼ねている一般紙誌、その他教科書的な文献である。文学作品は文体を重じるものであるが参考にとどめた。というのは、16世紀に最初の印刷文献があらわれて以来バスク文学の遺産が残されて来ているが、そのほとんどが、韻文あるいは翻訳であるため、少数の散文のみを取り出し、参考にとどめざるを得なかった。現代の作品は『Gure Herria』誌にもしばしば記載されているが、これらも一般的バスク文という意味から参考にとどめた。

バスク構文の一般的性質

2.-1. 語順の多様性

諸文献にほとんどあらゆる語順の文（肯定平叙文に限って調べたもの）が見いだされたが、バスク文の語順のいくつかの性質を調べるため、一つの試みを行った。

次の文例表は、「ピアレシュは両親と家の中にいる」という文意を表わず文構成要素を数理的に組合せて作った語順の全てを網羅したものである。

その文構成要素は次の四つである。

Piarres : 名格で主語, ピアレシュは。

burrasoekin : burraso-ekin は共格で状況補語, 両親といっしょに。

etchearen barnean : etche-a-r-en は属格で barne の限定補語, その家の。barne-a-n は位格, その内部に。二語で状況補語となっている。

da : izan の直説法, 現在, 3人称単数, ~いる。

1. Piarres burrasoekin etchearen barnean da.
2. Piarres etchearen barnean burrasoekin da.
3. Piarres burrasoekin da etchearen barnean.
4. Piarres etchearen barnean da burrasoekin.
5. Piarres da etchearen barnean burrasoekin.
6. Piarres da burrasoekin etchearen barnean.
7. Burrasoekin Piarres etchearen barnean da.
8. Burrasoekin etchearen barnean Piarres da.
9. Burrasoekin Piarres da etchearen barnean.
10. Burrasoekin etchearen barnean da Piarres.
11. Burrasoekin da Piarres etchearen barnean.
12. Burrasoekin da etchearen barnean Piarres.
13. Etchearen barnean Piarres burrasoekin da.
14. Etchearen barnean burrasoekin Piarres da.
15. Etchearen barnean Piarres da burrasoekin.
16. Etchearen barnean burrasoekin da Piarres.
17. Etchearen barnean da Piarres burrasoekin.
18. Etchearen barnean da burrasoekin Piarres.
19. Da Piarres burrasoekin etchearen barnean.
20. Da Piarres etchearen barnean burrasoekin.
21. Da burrasoekin Piarres etchearen barnean.
22. Da burrasoekin etchearen barnean Piarres.
23. Da etchearen barnean Piarres burrasoekin.
24. Da etchearen barnean burrasoekin Piarres.

被質問者は仏の Saint-Jean-Pied-de-Port の近村つまりバス・ナヴァール方

言で育ち、教育及び社会生活はフランス語で行い、ここ十余年日本に住み、日本語を十分理解できる人である。

まず、「ピアレシュは両親とその家の中にいます」という意味のバスク文を云ってもらったところ、次のような文が回答された。

Piarres aita ta amarekin etchean da.

この文は語彙的には文例表とは異なるが、表の1の文の語順と同じものである。

N. B. aita ta ama は“父と母”，etchean <etche-a-n は接尾定冠詞+位格。

次に上記の文例表を示し、バスク文として不可能なものを指摘させたところ、最後の19～24の6文がそれであった。19～24の各文はいずれも動詞文頭が共通点で、しかもそれが他の文と異なるところである。

次に文1および19～24を除き、各文の意味のニュアンスを説明してもらった。

この試みで推測されたことは、まず最も一般的な語順である。この推測の補いとして、上記の表の文にない他の種類の文構成要素からなる文もいくつか答えてもらった。

「私はパウロにその本を持って行く」→Liburua Paulori eramaten diot.

「父は強く話した」→Aita azkarki mintzatu da.

「ピアレシュはバスク人です」→Piarres eskualduna da.

次に推測されたことは、肯定平叙文での動詞文頭の語順が、文献では極めて少数ながら存在するものの、一般的には不可能な語順であることである。

しかし表の24文中18文が可能ということから、バスク文の語順の多様性は確認できよう。

2.-2. 中性文体の語順

最も一般的な語順つまり、<中性文体>を確認するにはまだ多くの調査が必要であるが、ここで肯定平叙文の中性文体に言及している唯一の文献(1の p. 49)である LAFITTE 師のそれを掲げておく。

1. 主語

2. 状況補語
3. 間接目的補語
4. 直接目的補語
5. 属詞
6. 動詞意義部
7. 助動詞

文例： Aita-Sainduak atzò bi erresumeri aphezpiku bat ararteko igorri
_{1 2 3 4 5 6}
 diote. (聖なる父は、昨日、二つの、国に、司教を、ひとり、とりなし人として、送っ
₇
 た。)

N. B. 訳はバスク文の語順通り。

2.-3. 動詞

構文上バスク動詞の次のような特質は語順に大きな意味を持つものと思われる。それはバスク文の述語動詞はその活用の語形の中に、法、時制、アスペクト、主語および目的補語の人称、数を指示する要素を持ち、従って状況補語を除く他の文構成要素はその指示に従って具体化されるという、いわば冗語的構造になっていることである。

例えば AROTÇARENA 師の強変化動詞の活用形を構成する形態素の分析を紹介してみよう (文献 2, p. 87)。

1. 仮定あるいは祈願法を指示する接頭辞。
2. 直接目的補語の人称指示の接辞。
3. 動詞の語幹。
4. 直接目的補語の複数指示の接辞 (-zki-)。
5. 可能あるいは直説法を指示する接辞。
6. 間接目的補語の人称指示の接辞。
7. 音便要素 (-a-)。
8. 主語の人称指示の接辞。
9. 主語の複数指示の接辞 (-te-)。
10. 未完了過去を指示する接尾辞。

Darmakot : d- は 2, -arm- は 3 (<erman), -a- は 7, -k- は 5, -o- は 6, -t は 8 の要素。私は彼にそれを持って行く。

肯定平叙文の語順

3.-1. 述語動詞の文末

肯定平叙文で最も多くみられるのは述語動詞が文末の要素となっているものである。

例えば、文献11は子供のための教科書的読本であるが、その「Sabin euskalduna, バスク人ジャビン」の章では、肯定平叙の単文18からなるものであるが、そのうち13文が文末動詞の文である：Sabin mutiltxo on bat *da.*, etc.

また一般成人の読み物では肯定平叙文と限定すると例文が少なくなるが、文献4 (p. 288) で LAFITTE 師によって“多くの作家の規範とされうる文体の書”とされている「Bi saindu eskualdunen bizitza, バスク2聖人の生涯」抜粋文では、肯定平叙文9文中4文が動詞文末の文である：Hogoi-ta-hamar urthetan *naiz.*, etc.

また単文しかまだ出てこない初級の学習書の文献5では、そのほとんどが動詞文末の構文である。

動詞文末の構文は、複文でも多くみられる。

Nik maite ditudan gauzak hastiatu dituzte. 私が好むものを彼らは嫌った(文献4)。

3.-2. 述語動詞に同化される構成要素

述語動詞に同化されているという判定は、まず弱変化動詞の場合、動詞意義部をつくる分詞と助動詞の間に他の要素が置かれていることである。

まず文意強調の小辞はほとんどその位置をとる。

Othe (疑問), omen (予測), ahal (可能), bide (蓋然), ohi (習慣), ari (進行), etc.

Ikasten ari naiz. 私は勉強しているところです(文献5)。

Eskual-Herria ere maite omen zuen biziki. 彼はバスクの国も本当に愛し

ていたそうだ (『G. H』1973. 5, 「Azken Elurra」p. 276)。

Agertuko othe dire nere anaiaren semeak? 私の弟の息子たちは現われるだろうか (文献4, p. 107)。

次に, 原因 *bait-*, *beit-*, 条件および肯定強意 *ba-*, 祈願 *ai-* の接頭辞など。

Piarressek untzia aurdiki badu ~, ピアレシュがびんを投げたら~ (文献1)。

Egarria baitzagon, errekarri buruz zohan. 彼はのどが渴いていたので, 小川に向った (文献10)。

Bazen mediku bat. いましたとも, 医者がひとり (文献4)。

また時には助動詞と意義部が位置をかえてその間に他の要素を置くこともある。これは LAFITTE 師によれば, 意義部の意味を補足, 強めるものとされる。

Piarressek liburua du Baionan erosi. ピアレシュはバイヨンヌで買ったのです, その本を (文献1)。

N. B. *Baiona-n* は状況補語。

上記の各文例では, 述語動詞の要素に同化されるものは, 文全体の意義にかかわるものか, あるいは動詞の意義を強めるものであることがわかる。つまり文意の一部しか荷わない構成要素は, ほとんどの場合述語動詞に同化されないのである。この現象からバスク文では述語動詞が意義価値として第一位に置かれているのではないかと推測できよう。

3.-3. 動詞の直前位

文末に動詞が置かれるのが一般的構文であり, また動詞が文の要と推測されることから, 次に動詞に最も近い構成要素を調べてみた。

弱変化動詞においては, ほとんどの場合意義部である分詞 (現在, 過去, 未来分詞) が置かれるので, その意義部の前におかれる要素を調べねばならない。

まず3.-2で指摘した文意強調小辞は, 動詞に同化した位置に来ない時は必ず, 前位をとっている。

その他の構成要素についても, 全て直前位にくることが可能である。

問題は、複数の構成要素があった場合、直前位の要素と他の要素の価値度の差異である。これについては中性文体以外の語順の文によって 2.-1 の被質問者のバスク人にたずねた結果や参考文献 1 の説明、また上記の意義部や文意強調小辞の位置から、直前位の価値度の高さが確認された。

Paulori sagara eman diot. 私はそのリンゴをパウロに与えた。

この文においては *sagara* が *Paulori* より価値度が高いのである。*eman* という過去分詞はそれより価値度が高い。

3.-4. 主語あるいは文頭の価値

主語はほとんど三人称の場合しか独立した要素として顕在しないが、その場合、主語は文頭に来るのが圧倒的に多い。

例えば 3.-1 の「*Sabin euskalduna*」で主語が顕在する単文では 2 文を除いて全て主語文頭の文である：*~eta oréngatik bere gurasoak geiago maite dute. Bere gurasoen poza da Sabin.*

また代名詞が主語として顕在することは稀れであるが（但し文献 5 の最初の章は、仏人に対する学習書を意識してか、代名詞主語を顕在させている文例が多い）、その場合はスペイン語の場合あるいは仏語の強調形人称代名詞が現われるものに近いと考えられる。

Ni erakasle naiz. この私、私が先生です（文献 5）。

一般的に文の構成要素における主語の価値を考える時、それがかなり高いものであることが認められる。バスク文においては、主語の顕在が述語動詞の形態素の冗語的な性質を与えられているので、動詞より低い、他の要素よりは高いと云わねばならない。

このことから主語が最も多く占める文頭の位置の価値度は、動詞の文末について高い価値を与えられていると推定されよう。

また自然の生理からして、音を線的に並べる文の成立条件を考えると、最初の音が最も印象を与えるものと考えざるを得ない。このことも文頭の価値度を裏付けるものと云えよう。

3.-5. 他の構成要素の位置

LAFITTE 師による中性文体の語順では、主語文頭、動詞文末の間に、他の要素の全てが置かれているが、実際には、他の要素が複数ある場合には分散されていることが多い。

例えば「ヨハネシュは昨日そのリンゴをパウロに与えた」という文は LAFITTE 氏の中性文体では : Joanesek atzo Paulori sagara eman dio. となるが、実際には、次のような語順が多い。

Atzo Joanesek Paulori sagara eman dio.

Atzo Joanesek Paulori eman dio sagara.

Paulori Joanesek sagara atzo eman dio.

Paulori Joanesek sagara eman dio atzo

Sagara Joanesek Paulori atzo eman dio.

Sagara Joanesek Paulori eman dio atzo. など。

これは、主語と動詞の間に複数の構成要素の全てを置くことが、文体的に重さを感じさせるということである。そのため実際には、主語に次いで価値を与えたい構成要素を文頭にして、分散させることが多い。

3.-6. 動詞の後位

動詞の後に他の構成要素が来る場合がある : Bere' gurasoen poza da *Sabin*. シャビンはその両親の喜びです (文献11)。

この場合 *Sabin* はほとんど文体的価値を与えられていない。

つまり肯定平叙文で述語動詞の後位の要素は、ほとんどの場合、前からの文脈で判明している意味の要素をつけ加えるにすぎないと云えよう。

3.-7. 例外的な価値づけ

参考文献 1 において指摘され、しかも実際の文例として 2 例しか確認されなかったものであるが、とりわけ弱変化動詞の文の場合、例外的な高い価値づけをされる位置がある。それは動詞意義部を助動詞の後に置き、代りに他の要素を置く語順である。

Semea da sortu. 男の子だよ、生まれたのは (文献 4)。

Enbachadorea du *hil gizon harek*. 大使である、あの男が殺害したのは (『*Herria*』1972. 12. 5)。

但し、この構文でも文意強調小辞は助動詞の直前に置かれる。

Semea *omen* da sortu.

否定文の語順

否定文の語順は肯定文のそれに準じて考えることが出来るが、問題は否定辞 *ez* の位置およびそれに応じて変わる他の構成要素の語順である。

4.-1. 否定辞 *ez* の位置

バスク文の否定の意は否定辞 *ez* で指示され、それは一般には述語動詞の直前位に置かれている。つまり動詞との同化要素と考えることができよう。

Ama ez da Bilbaon. 母はビルバオにはいません (文献8)。

Ogia ez da ona. そのパンはよくない (文献4)。

Ez dakit zer. 私は何か知らない (文献7)。

弱変化動詞の場合は助動詞の前位に置かれ、意義部の分詞はほとんどの場合助動詞の後位に変わっている。

Egiazko amodioa ez da hiltzen. 真の愛は消えない (文献2)。

Ogirik ez duzu erosiko. あなたはパンを買わないだろう (文献4)。

また文意強調辞との位置関係をみると、ほとんどの場合 *ez* と述語動詞の間に強調辞が置かれている。恐らく強調辞の方が *ez* より価値が高いのであろう。

Ez othe da behia? それは牛じゃないだろ (文献4)。

Ez baitzen han errekarik, egarri zauden guziak. 小川がなかったので、彼らは皆のどを渴していた (文献10)。

4.-2. 文頭の *ez*

肯定文では動詞文頭の文は不可能であったが、否定文では *ez* を同化させた形の述語動詞を文頭におく語順が多い。とりわけ主語が名詞あるいは代名詞として顕在しない場合は、ほとんどが述語動詞が文頭に來ている。

Ez zen bere semea bezala. 彼は自分の息子のようではなかった (文献4)。

Ez da geihago uririk. もう雨ではない (文献2)。

弱変化動詞の場合は、一般的には *ez*+助動詞と意義部の分詞との間に他の要素が入る語順が多い。

Ez nuke urean sartu nahi. 私はできたら水に入りたくない (文献4)。

Ez duzu hau esmatuko. あなたはそれは判るまい (文献2)。

Ez gira eskuaraz mintzatzen zure amarekin. 私たちはあなたのお母さんとはバスク語で話さない (文献7)。

最後の文のように他の要素が複数あるときは、価値の高いものを助動詞と意義部の間に置き、他は後に並べる。

Ez naiz menditik pasatuko karrosarekin 私は車で山など通って行くものですか (文献4)。

4.-3: 主語の位置

否定文で主語が顕在する場合は、肯定文と同じく文頭に置かれることが多い。

Zaldiaren itzalak ez gitu izitzen. 馬の影はわれわれを怖がらせない (文献4)。

Inozentak ez du aditzen. 無垢な者は叱咤する声も聞えない (『Gure Herria』1973. 6, 「Horra nun den Urnieta」)。

主語が、述語動詞と同化しているように、助動詞と意義部の分詞との間に置かれた文がまれに認められる。これは文頭の主語よりその価値が高いと考えられる。

Ez du Piarresek aurdiki ピアレシュは、あの男はそれを投げなかったよ (文献1)。

主語以外には動詞しか要素がない時の文末主語の文があったが、これは主語の弱化というよりむしろ動詞の強調と考えられる。

Ez du ukatzen Arantxak. 否となど、アランチャは云わないよ (文献5)。

ま と め

5.-1. バスク単文、特に平叙文の肯定、否定の文における構成要素の語順を、その<文体的価値>という観点から考察して来たが、それについては以下の様な特徴を指摘することができる。

まず、原則として述語動詞が第一の文体的価値を与えられ、肯定文では文末の位置が与えられていることである。しかもバスク文の語順の価値序列の基準となっていると云えよう。厳密に云えば、バスク文の述語動詞の最も一般的な形である弱変化動詞の文では、その助動詞が価値序列の真の基準である。

語順の価値序列は、原則的には、この基準となる述語動詞という構成要素をもとにして、第一に述語動詞に同化する位置、つまり述語動詞の直前位、あるいは助動詞と意義部分詞との間の位置である。第二に位する位置は文頭である。これは通常顕在する場合の主語が占める位置であり、また否定文で主語が顕在しない場合否定辞と同化した述語動詞が占める位置であることから推察できる。

その他の序列については、述語動詞という基準に対し、前位を文頭へと向って順位づけられている。最後に述語動詞の後位が来るが、この位置は価値度が著しく低くなることが認められる。

5.-2. バスク単文の肯定平叙文の最も一般的な語順では述語動詞が文末に置かれ、しかも第一の文体的価値を与えられている。それはなぜだろうか。文は本来音の線的な集合体である以上、最初の音の表現単位つまり文頭の構成要素に第一の価値が与えられるのが自然である。しかもバスク文の語順の自由度は大きい。なぜ文末が最高の価値をとる位置となっているのか。

こうした設問については、日本語の述語文末について永山勇氏⁸⁾が述べているように、言語の本質は社会的な習慣である以上、それはバスク語の習慣であるとしか答えられないかもしれない。しかし、私はあえて、この設問に対して意見をまとめておきたい。

まず文末に置かれる構成要素であるバスク語述語動詞の性質の中に一つの手

掛りがあると思われる。

バスク語動詞は、2-3および註5)でふれたように、とりわけその強変化動詞が象徴していると思われるが、述語動詞の活用語形の中に文としての基礎的構造要素を形態素として抱合していることである。つまり法、時制、アスペクト、さらに文の自由構成要素(状況補語や副詞など)以外の主語、直接あるいは間接補語の人称、数が指示されていて、実際の構文はいわば動詞の各形態素を冗語的に具体化していると言えよう。

このようなバスク語動詞にみられる充足的、包括的、総合的性質は、バスク語そのものの特性とも、さらにはその言語を成立させている民族の思考法の特性とも云えよう。

バスク語の構造からみる限り、確かにバスク人は、事象をより総合的に、包括的に、また具体的に、即物的に見、摺まえようとしている。

こうした特性を考えると、冗語的要素は価値度が低く、しかもまず散在的に提示され、最後にすべてを総合するように、集約するようになると考えられよう。いわばバスク語は、帰納的とも云いうる思考形式を取るものである。それ故、文末に全てを総合するような動詞が来るのであろう。

ロマンス語群の中の<言語島>として、系統の異なる諸言語の影響を多く与えられて来たバスク語であるが、語順に関する限り、原則として文末を基準とする<文体的価値>の序列は、孤立語として不明なところの多いバスク語の本来的な特性として遺されたものと推察できるのではなかろうか。

(1974. 9. 10)

註

- 1) 市邨学園短大人文学研究会『人文科学論集』第5, 6, 7, 8-9, 10, 15, —1969・2~1974・2に発表した6篇, 未完のもの。
- 2) 本稿と同じく「文法」の各論の補正, 発展形式の拙論として, 以下の二点を参照されたい。
「バスク語のすべて」(小林英夫編『私の辞書』丸善, 1973)—「文法・I」の「エシュクアラについて」で学習, 研究のための辞書, 事典, 研究書その他の文献の紹介が欠けていたのを補ったもの。

「バスク語彙における借用について」(日本ロマンス語学会『ロマンス語研究』6号1972)―「文法・II」の「バスク語彙形成の沿革について」で簡略にしたバスク単語とラテン語との関連についてまとめたもの。

- 3) 句=語群における語順の文法的規則のおよそは以下の通りであるが、詳しくは註1)の各篇を参照されたい。
 - a) 限定辞については、冠詞は全て接尾冠詞：*gizon-a*, *gizon-ak*, 指示形容詞は被限定語の後位：*gizon hau*, 数詞, 所有形容詞は前位：*bi gizonak*, *bigarren gizona*, *zure aita*, cf. *gizon bat*。
 - b) 修飾語については、付加形容詞は被修飾語の後位：*liburu eder*, 副詞は形容詞を修飾する場合は前位 *biziki eder* であるが、その他はかなり自由度が認められる。
 - c) 限定補語については、名詞あるいは動詞不定形, 分詞形の場合は被限定語の前位：*odol chorta*, *arno baso itzul bide*, *joan gogoa*; 接辞によって限定補語として機能する場合も前位 *aita-r-en izen*, *Baiona-ko gizon*, *grazia-z bethe*。
 - d) 後置詞は常に後位：*goiz danik*, *erregeren kontra*; 疑問詞は単文の場合は文頭：*Nun da ama?* *Zoin gizon?* *Zer erran duzu?*
- 4) <文法的価値>では例えば仏語の *Paul aime Marie. Marie aime Paul.* のように語順によって主語あるいは目的補語の機能を与えられる現象は存在しない。また<意味的価値>については、語群レベルでの *gaizo gizona* (憐れな一), *gizon gaizoa* (お人好しな一) が唯一の例である。
- 5) バスク語動詞は活用から少数の強変化動詞と大多数の弱変化動詞とに分類できる。強変化動詞は一語としての活用形のうちに文の基礎的な要素(法, 時制, アスペクト, また主語および目的補語の人称と数)の形態素を抱合している。弱変化動詞は意義と時制の一部の指示を荷う分詞(現在, 過去, 未来分詞)と, 文法的機能を指示する助動詞から構成される活用をするものである。
- 6) 拙論「Bernat Decheparekoa の *Lingvae Vasconvm Primitiae* について」(市邨学園短大『人文科学論集』1975)を参照されたい。
- 7) 註1)の文献, 註2)の「バスク語のすべて」を参照されたい。仏二大方言の統合的なものをネオ・ラブール方言(Lafitte)と呼ぶこともある。
- 8) 永山勇「述語はなぜ文の最後にくるか」(明治書院『文法』昭44.1)。

参 考 文 献

1. P. Lafitte: *Grammaire Basque (Navarro-Labourdin littéraire)*. 1962, Bayonne.
2. S. Arotçarena: *Grammaire Basque (Dialecte Navarro-Labourdins)*. 1951, Bayonne.
3. M. de Azkue: *Morfología Vasca, I·II·III (Gramática básica dialectal*

- del Euskera). 1969, Bilbao.
4. Ezkila: Méthode Basque pour débutants. 1963, Urt.
 5. O. Yon: Méthode d'Eskuara radiophonique, premier cours. 1969, Hendaye.
 6. F. Mispiratzeguy: Dictionnaire Français-Basque, Grammaire. 1936, Versailles.
 7. B. Dagorret: Apprenons à parler le basque. Fas. I & II. 1969, Saint-Palais.
 8. J. E. Lasa: Método Elemental de Vasco. 1961, Madrid.
 9. I. L. Mendizabal: La Lengua Vasca-Gramática, Conversacion, Dictionario. 1943, Buenos Aires.
 10. Erakasle: Eskual Alorretik. 1970, Bayonne.
 11. Sabin Euskalduna. 1931, Zarautz.
 12. M. de Azkue: Diccionario Vasco-Español-Francés. 1905, Bilbao.
 13. P. Lhande: Dictionnaire Basque-Français (Dialectes Labourdin, Bas-Navarraais, Souletin). 1926, Paris.
 14. A. Griera: Vocabulario Vasco, I & II. 1960, Barcelona.
 15. Ph. Aranart & P. Lafitte: Vocabulaire Basque. sans date, Bayonne.
 16. W. J. van Eys: Dictionnaire Basque-Français. 1873, Paris.

その他の文例の大部分は、バスク語「Herria」紙、「Gure Herria」誌の諸号からのもの、およびバスク人神父 L. Labarthe 師の教示によるものである。